

地域の課題解決に向けての取り組み

【資料7】

出生		0歳～	3歳	15歳	18歳
サービス		早期支援システムの構築 B Y ・子どもが入園する前の段階で、相談・療育に繋がっていくシステムの構築が必要。 ・「障がい」にとらわれず、保護者が受け入れやすい窓口を考慮すること。			
		園や学校との連携 D ・発達障がいの基本的な知識はあっても、対応は一括りにできない。 ・必要な支援が途切れないよう、顔の見える関係作りが大切である。 障がいを持つ親と暮らす子どもの支援 D ・子どもたちが日中過ごす学校や園が唯一の見守り機関となるケースもあるので、連携が取りやすくなると良い。			
		発達障がい者への支援 B Y ・発達障がいをベースに持ちながら、的確な診断を受けられず、大人になるまで悩み苦しんだ結果、二次障がいとして精神疾患に至っている人が多い。 中途障がい者への支援 G ・40代以降に脳血管障がいや交通事故で障がいを抱え、生活の変化への対応、日中活動先の確保が難しい。			
		本人の思いをどう実現していくか F X ・本人の思いを引き出せるように写真や文字にして伝わりやすい方法で説明。 ・家族や関係者の不安も軽減できるよう、理解を求めながら時間をかけることも必要。 制度の理解 A X ・使える制度・使えない制度があったり、制度外のものを活用したりするが、支援者はもちろん、利用者も制度等を学ぶ機会が必要。 住まいに関する件 H ・低家賃でのバリアフリー住宅が少ない。 ・地域移行を進めるにも受入れ先がない。 ・施設入所、GH/CHの希望が多いが、受入れ先がない。 ・家族だけで支えているままではなく、社会で支える地域作り・仕組みが必要。			
医 療		移動手段・方法 X ・通学や通所による「移動支援」の利用は難しい。 ・制度外と言われてしまう買い物や移動などは使えず、出かける機会が減る。 ・レスパイトは使えるが毎日となると負担が増大。 ・なんらかの工夫と社会資源の発掘が必要。			
		サービスに結びつきにくいケース X ・てんかん発作、こだわり行為などが理由で福祉サービスに繋がりにくいことがある。 ・家族が支援を担っている場合、家族が高齢になると負担が大きくなる。			
理解・啓発		医療的ケア E ・医療的ケアを必要とする人の短期入所や対応できる事業所が少ない 健康管理 E ・障がいを抱える人の受診や生活習慣病などのケアが難しい。			
		「話せる場」「声をひろう場」 C ・同じような悩みを持つ親たちの集まりや、連携・意見交換などのピア(Peer)的な動きが出てくることで、困り感のある子ども達への支援が地域社会の中で生まれてくることが望ましい。 ・障がい者自身の交流やピア的な繋がりができることで、自然な支え合いや活動の場が広がる。 「障がい理解」の啓発 C ・本人・家族の障がい受容は簡単なことではないが、理解することで楽になることもある。 ・関係者にも各障がい特性や個々の特性を理解してもらうことで、適切な対応ができるようになり、支援の幅が広がる。			

左記の結果として大変になっていると思われること

- 家族等の関係性
- ・虐待が疑われるケースでも単純に加害者・被害者と区別できないことも多く、本人だけでなく家族にもどう支援していくか。
- ・長い年月で出来上がっている関係性や価値観を変えるのは難しいが、長期間の関わりと信頼関係作りが必要。
- 連携と役割分担
- ・障がい福祉分野だけでなく、子育て・介護保険・学校・医療機関・保健機関などと顔の見える関係作りや役割分担も必要。
- 幅広い制度の知識
- ・支援が必要なケースほど他障がいや他分野の社会保障制度などの知識も求められる。
- ・障がい福祉分野だけでなく、子育て・介護保険・学校・医療機関・保健機関などと顔の見える関係作りや役割分担も必要。
- 相談支援事業所の過重業務
- ・相談件数は年度ごとに増加しているが、相談員の人数は変わらず。
- ・本当は支援が必要でも声があげられないケースが埋もれていってしまう可能性。
- ・目の前にあるケースに対応することはできても、気になるケースは後を絶たないのが実情。

- 居宅支援部会 **A**
- 発達障がい部会 **B**
- 理解・啓発メッセンジャー **C**
- 連携(教育)部会 **D**
- 連携(医療)部会⇒医療部会 **E**
- 連携(精神)部会 **F**
- 日中活動部会 **G**
- すまいの部会 **H**
- 相談支援部会 **X**
- こども部会 **Y**
- 進捗管理調査